

ベーシックテクニック

顎変形症の術前歯科矯正治療のすすめ方

根津 浩・永田賢司・吉田恭彦・柴田考典 編著

A4判・144頁・定価 9,450 円（税込）

2012 年 6 月 18 日 ヒョーロン・パブリッシャーズ刊

菊池 哲

（千葉県成田市／コスモス矯正歯科医院）

本書は、BSC（バイオプログレッシブ・スタディクラブ）の中心的存在である根津 浩、永田賢司、吉田恭彦の3先生が、TMJ・TMDの世界的なリーダーでもある北海道医療大学の柴田考典教授とともに編集・執筆を行い、次代の矯正歯科界を背負う若手とともにまとめた、たぐいまれな本である。

従来、顎変形症に対する外科的治療に伴う術前歯科矯正治療の教育は、大学の医局で先輩から後輩へ、まるで徒弟制度のようになされてきた。しかし、平成3年に日本顎変形症学会が発足し、わが国における顎変形症の治療、研究の中心的役割を果たすようになったため、術前歯科矯正治療を必要としないという意見はさすがになくなったが、その具体的な方法をまとめた本書は、試行錯誤している若い認定医クラスの矯正歯科医にとって朗報となるであろう。

顎変形症の治療は、口腔外科医と矯正歯科医の協働作業によりなされる治療のため、お互いの意思の疎通を必要とする。しかし、口腔外科医から上下歯列幅径を合わせる必要性があるのにできていない症例がある、と指摘されているのが現実である。本書には最終目標咬合の様式と、

インターカスペーションなどが具体的に詳述されており、咬合異常に伴う機能的問題への配慮、外科的矯正の治療目標（Surgical VTP）設定法、術前歯科矯正治療におけるレベリングの目的と方法、特に臼歯間幅径のコントロールなど多岐にわたり、提案している。

なかでも特筆すべきは、正面セファロの診断への活用である。正面セファロは矯正の世界では、撮影はするが実際には分析されることが少なく、どのようにして評価をしたらよいのか、矯正歯科界全体がとまどっているのが現実である。

Dr. Gugino の Zero Base Bioprogressive Philosophy は、この正面セファロの情報を見事に診断に取り入れ、治療目標を設定している。また、筆者の昔からの尊敬すべき友人で、Prof. Ricketts が創設した Foundation for Orthodontic Research の元会長である Dr. Duane Grummons は、1994 年に出版した名著“Orthodontics for The TMJ-TMD Patient”のなかで、顎変形分析に正面セファロを使い、“Simplified Frontal Asymmetry Analysis”を提案している。なお、Dr. Grummons は今年の 11 月に秋葉原で行われる BSC30 周年記念大



会に招待され、講演すると聞いているので、今から楽しみだ。

さらに、本書は術前歯科矯正治療の保険請求にまで言及している。これは、術前歯科矯正治療に馴染んでいない若い矯正歯科医には有益な情報であるに違いない。また、本書は術前歯科矯正治療のみならず、矯正治療上の優先的な課題として、歯列側方コントロールの重要性を、成書として初めて、具体的にフォーカスを当てている。これらの点から、敬意を持って本書を推薦したいと思う。

最後にヒョーロン編集部にお願いが2つある。

①本書は、世界にも類をみない内容となっており、ぜひ英語版を出版されることを提案したい。日本語を理解できるのは世界人口の 60 分の 1 である。英語で表現しなければ無に等しい。

②今後、口腔外科医が睡眠呼吸障害に注目すると、その術式が 1 Jaw surgery から 2 Jaw surgery になってくるとされる。そうでなければ、睡眠呼吸障害を考慮した顎外科手術が不可能となる。ぜひ本書の続編を企画していただきたい。